

## 病虫害発生予察情報予報第7号（10月の予報）

佐賀県

### 目次

1. 10月の病虫害	1
2. 予報の内容・根拠等について	2
3. 気象概要	2
4. 10月の予報	
<u>普通作物</u> （水稲、大豆）	3
<u>果樹</u> （カンキツ）	5
<u>野菜</u> （イチゴ、ナス、キュウリ、アスパラガス、野菜類共通）	9
<u>花き</u> （キク）	17
5. <u>全国・佐賀県で多発生している病虫害及び新たに発生した病虫害</u>	19
6. <u>農薬の適正使用について</u>	19

## 1. 10月の病虫害（予報で対象とした病虫害の中から抜粋）



大豆のハスモンヨトウ



イチゴのうどんこ病



イチゴのハダニ類



キクのアザミウマ類

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部  
〒840-2205 佐賀市川副町南里1088  
TEL (0952)45-8153 FAX (0952)45-5085  
HPアドレス <http://www.pref.saga.lg.jp/web/boujo>

## 2. 予報の内容・根拠等について

### 予報の内容（予想発生量）

○ 平年（佐賀県の過去10年間）及び前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

### ○ 留意点

平年値との比較であるため、平年値が低い病害虫は、「平年より多い」場合でも見かけの発生は多くないことがあります。発生が毎年目立ち、平年値が高い病害虫は、「平年並」や「平年よりやや少ない」場合でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

### 予報の根拠

○ 農業技術防除センターが実施する巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

○ 病害虫の発生現況および気象条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示しています。これらを総合的に判断して発生量を予想しています。

### 写真

○ 1ページ目には、予報で対象とした病害虫の写真を抜粋して掲載しています。

○ 3ページ目以降には、巡回調査時の各作物の生育状況の写真を掲載しています。

## 3. 10月の気象条件

病害虫の発生に關与する10月の気象条件については、福岡管区気象台発表の3ヶ月予報（平成27年9月25日）における確率予報から、「気温：平年並」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による10月の要素別確率（%）及び病害虫の発生に關与する気象条件

要素	10月の気象予報（確率予報）			病害虫の発生に關与する気象条件
	低い（少ない）	平年並 （佐賀市の平年値）	高い（多い）	
気温	30	40（18.6℃）	30	並
降水量	30	40（75.5mm）	30	並

## 4. 10月の予報

### 普通作物

#### 【概要】

作物名	病害虫名	10月の 予想発生量		<a href="#">病害虫防除の てびき記載頁</a>	備考
		平年比	前年比		
水稲	トビイロウンカ	やや少	やや少	161～165	
大豆	ハスモンヨトウ	並	<b>やや多</b>	218～219、224～226	
	カメムシ類	並	並	220、226～227	

#### 【特記事項】

##### 【水稲】

##### 1. トビイロウンカ

本虫の発生状況を必ず確認し、坪枯れを生じる恐れがある場合には早急に防除を実施する。

##### 2. コブノメイガ

もち品種や葉色の濃い圃場では、本虫による被害が多くなる場合があるので、発生状況を確認し、防除を行う。

##### 3. 薬剤散布

防除に当たっては、農薬の使用基準（収穫前日数等）を遵守する。

##### 【大豆】

##### 1. 紫斑病

若莢期～子実肥大中期に防除を実施する。

### 水稲（普通期水稲）

（巡回調査日：9月15～17日）



巡回調査時の生育状況

### 1. トビイロウンカ

#### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

#### 2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生株率は0.8%（平年18.7%、前年6.1%）であり、平年より少なく前年よりやや少ない。（図1）〈－〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

#### 3) 防除上注意すべき事項

(1)防除対策については、特記事項を参照。

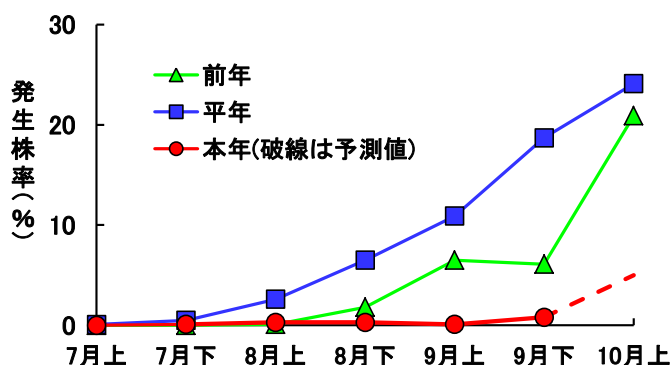


図1 トビイロウンカの水稲での発生推移

# 大豆

(巡回調査日：9月15～17日)



巡回調査時の生育状況

## 1. ハスモンヨトウ

### 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

### 2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生株率は7.3%（平年4.8%、前年1.6%）であり、平年よりやや多く前年より多い。（図1）〈±〜+〉
- (2)県内9地点のフェロモントラップによる誘殺数は平年並で推移している。（図2）〈±〉
- (3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1)圃場毎に発生量は異なるため、必ず各圃場での発生状況を確認し、幼虫による加害が続いている圃場では防除を行う。
- (2)幼虫は大きくなると日中は物かげにかくれ、夜間に活動する習性があるので、薬剤散布は夕方に行う。

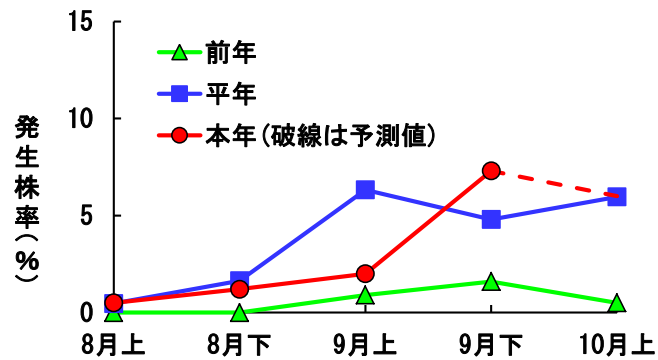


図1 ハスモンヨトウの大豆での発生推移

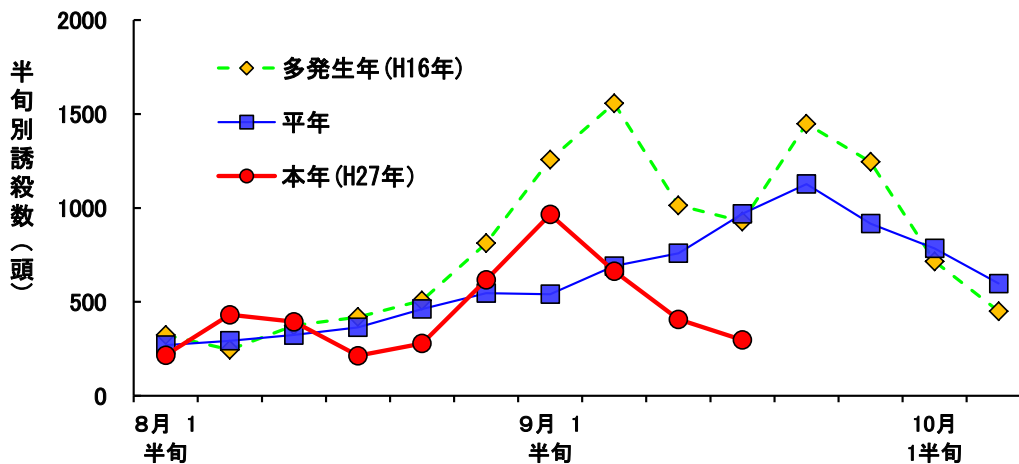


図2 フェロモントラップによるハスモンヨトウの半旬別誘殺数（10月2半旬まで）  
（農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内9地点の平均誘殺数。ただし、年によっては、8月2半旬頃から調査開始の地点がある。）

## 2. カメムシ類 (アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、ホソヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ等)

### 1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年並)

### 2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生株率は0.1% (平年0.3%、前年0%) であり、平年及び前年並である。(図1) <±>

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。<±>

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場でカメムシ類が散見される場合は、臨機防除を行う。

(2) 防除に当たっては、薬剤が着莢部によくかかるように散布する。

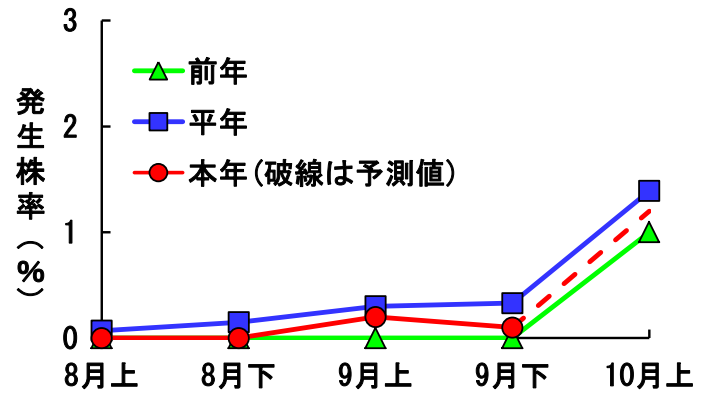


図1 カメムシ類の大豆での発生推移

## 果 樹

### 【概要】

作物名	病害虫名	10月の 予想発生量		<a href="#">病害虫防除の てびき記載頁</a>	備 考
		平年比	前年比		
カンキツ	ミカンハダニ	並	並	259~263	
	チャノキロアザミウマ	やや少	並	252~259	
果樹全般	カメムシ類	やや少	やや少	カンキツ：266~269 ナシ：318~319 ブドウ：360~361	<a href="#">病害虫対策資料第10号</a> 参照

### 【特記事項】

#### 【カンキツ】

##### 1. かいよう病

台風襲来や強風雨が予想される場合は、必ず事前に防除を行う。また、罹病枝や罹病葉は除去する。

##### 2. 果実腐敗

果実腐敗を防止するために、品種ごとに適期に薬剤散布を丁寧に行う。さらに、降雨時・結露時等の収穫は避けるとともに、果実に傷をつけないよう収穫を丁寧に行う等の耕種的対策も励行する。

##### 3. ミカンサビダニ

被害果が認められる園では早急に防除を行う。

## 【ナシ】

### 1. 黒星病

翌年の伝染源となる鱗片生組織等への感染を防止するため、収穫終了後も防除を徹底する。また、落葉した葉は本病の伝染源となるので、必ず園外で処分する。

## 【ブドウ】

### 1. ベと病・褐斑病

べと病及び褐斑病による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のため収穫終了後も防除を徹底する。また、落葉した葉は本病の伝染源となるので、必ず園外で処分する。

## 【キウイフルーツ】

### 1. かいよう病

秋期以降の感染を防止するため、銅水和剤を定期的に散布する。

## カンキツ

(巡回調査日：9月16～24日)



巡回調査時の生育状況

### 1. ミカンハダニ

#### 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

#### 2) 予報の根拠

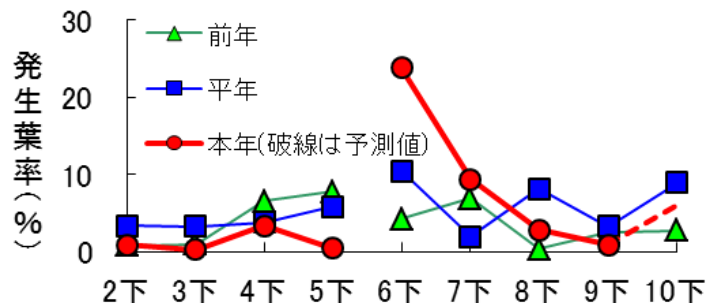
(1)巡回調査では、発生葉率は0.9%（平年3.3%、前年2.5%）であり、平年及び前年よりやや少ない。（図1）〈ー～±〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

#### 3) 防除上注意すべき事項

(1)殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年使用した殺ダニ剤は使用しない。

(2)低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫の数が0.5～1頭）に防除を行う。



注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査

図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移

# 果樹全般

## 1. カメムシ類

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生量

①フェロモントラップ（図1：県平均）による9月上中旬の誘殺数は平年並で推移をしており、予察灯（図2：県平均）については平年より少なく推移している。〈ー～±〉

②9月中下旬に行ったヒノキ毬果における寄生数調査では、1地点あたりの成幼虫数は1.0頭（平年10.9頭、前年15.9頭）で、平年及び前年より少ない（表1）。〈ー〉

③県内各地で採集したヒノキ毬果における9月中下旬の平均口針鞘数は12.0本/果（平年21.4本、前年16.0本）で、平年よりやや少なく前年並である（表1）。〈ー～±〉

#### (2) 気象予報

①並発生の条件となっている。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

(1)こまめに園内を見て回り、飛来を確認した場合は早急に防除を行う。

(2)県内各調査地点における誘殺状況の推移については、佐賀県農業技術防除センターHPの「[病害虫データ情報](#)」を参照する。

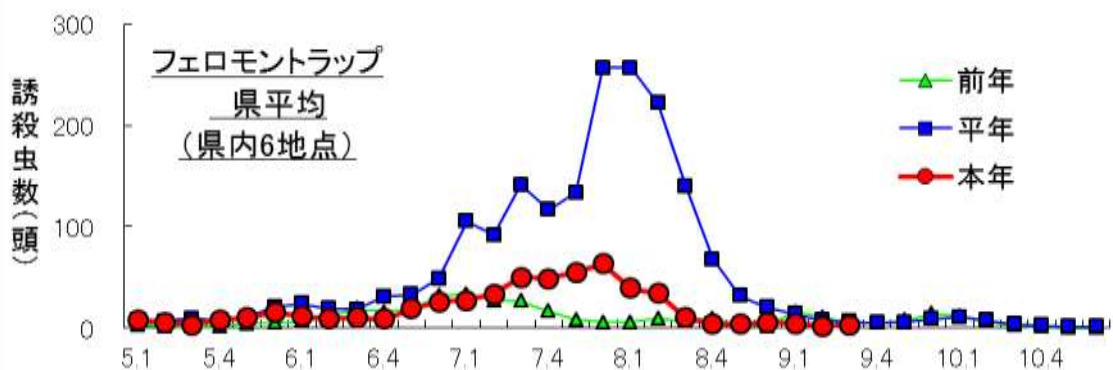


図1 フェロモントラップによる果樹カメムシ類の誘殺推移（県内6地点平均）

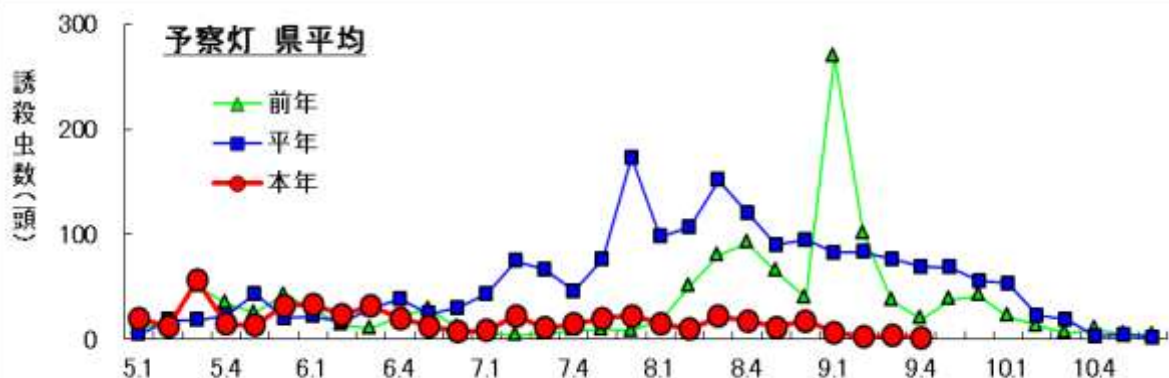


図2 予察灯による果樹カメムシ類の誘殺推移（県内3地点平均）



表1 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生虫数及び口針鞘数

No.	調査地点	ヒノキ毬果における寄生状況							口針鞘数					ヒノキ毬果 2) 着果程度
		7月 下旬 合計	8月 上旬 合計	8月 下旬 合計	9月 上旬 合計	9月下旬		9月 下旬 合計	7月 下旬	8月 上旬	8月 下旬	9月 上旬	9月 下旬	
						成虫 <sup>1)</sup>	幼虫							
1	上峰町 1	3	2	3	6	5	1	6	0.5	9.2	4.3	8.4	8.2	やや少
2	神崎市 1	0	2	0	3	0	0	0	0.0	1.1	7.2	9.0	12.1	やや少
3	小城市 1	4	9	3	0	0	0	0	1.8	12.0	11.1	16.5	12.4	少
4	多久市 1	-	-	-	-				-	-	-			極少
5	唐津市 1	-	-	-	-				-	-	-			極少
6	唐津市 2	23	1	3	0	0	0	0	1.1	10.6	20.1	11.0	9.2	少
7	伊万里市 1	-	-	-	-				-	-	-			極少
8	伊万里市 2	6	1	0	0	0	0	0	0.7	10.9	24.9	13.3	14.4	少
9	伊万里市 3	-	-	-	-				-	-	-			極少
10	白石町 1	6	2	7	1	1	0	1	0.1	3.0	12.2	5.1	5.3	少
11	鹿島市 1	3	-	-	-				0.2	-	-			少
12	鹿島市 2	-	-	-	-				-	-	-			極少
13	鹿島市 3	-	-	-	-				-	-	-			極少
14	太良町 1	16	14	1	0	0	0	0	3.0	15.6	18.4	19.7	22.3	少
15	太良町 2	-	-	-	-				-	-	-			極少
	平均	7.6	4.4	2.4	1.4			1.0	0.9	8.9	14.0	11.9	12.0	少
	平年	12.7	14.1	15.6	13.6			10.9	1.8	5.5	12.5	17.0	21.4	
	前年(H26年)	10.6	16.2	22.7	20.7			15.9	0.7	5.5	11.1	14.4	16.0	やや多

1)チャバネアオカメムシの寄生が主であった。

2)ヒノキ毬果着果程度:福岡総農試の達観調査法(一部改変)に基づいて調査

- ・極少:ほとんど結実が見あたらない
- ・少:梢頭部にわずかに結実
- ・やや少:梢頭部から中央部周辺にかけて結実した樹と梢頭部にわずかに結実した樹が混在
- ・中:梢頭部から中央部付近にかけて結実
- ・やや多:梢頭部から最下部にかけて全面的に結実した樹と全面的に結実しない樹が混在
- ・多:梢頭部から最下部にかけて全面的に結実
- ・極多:梢頭部から最下部にかけて全面的にブドウ状に結実
- ・極多:梢頭部から最下部にかけて全面的にブドウ状に結実



# 野 菜

## 【概要】

作物名	病害虫名	10月の 予想発生量		<a href="#">病害虫防除の てびき記載頁</a>	備考
		平年比	前年比		
イチゴ (本圃)	うどんこ病	並	少	194～196	<a href="#">病害虫対策資料第14号</a> 参照
	ハダニ類	<u>やや多</u>	並	204～205	
	アブラムシ類	<u>やや多</u>	並	210～211	
ナス	アザミウマ類	<u>やや多</u>	<u>多</u>	242	
	コナジラミ類	少	並	240～241	
	ハモグリバエ類	やや少	並	243	
キュウリ	べと病	並	並	173～174	
	うどんこ病	並	並	179～181	
	褐斑病	並	<u>多</u>	177	
	アザミウマ類	並	並	188～189	
	コナジラミ類	やや少	並	187～188	
アスパラ ガス	茎枯病	並	並	313～314	
	褐斑病	<u>やや多</u>	<u>やや多</u>	314～315	
	斑点病	<u>多</u>	<u>多</u>	314	
	アザミウマ類	並	並	317	
	ハダニ類	やや少	やや少	317～318	
野菜・花き 共通	チョウ目害虫（ハ スモンヨトウ、オオハコ ガ）	並	やや多	160, 162 イチゴ：206～207 ナス：239～240 アスパラガス：316, 319 キ：383～384	

## 【特記事項】

### 【イチゴ】

#### 1. うどんこ病

一部の圃場で発生が認められる。花及び果実での発生を防ぐため、株の活着時～頂花房開花前までは、約10～14日間隔で他系統薬剤を組み合わせた防除を行い、伝染源となる葉での発生を抑える。（[病害虫対策資料第14号](#)参照）

#### 2. ハダニ類

多くの圃場で発生が認められる。有効薬剤によりハダニの密度を抑えた後、天敵（カブリダニ類）を放飼して防除を行う。（[病害虫対策資料第14号](#)参照）

#### 3. 健全親株の確保

次年度作での炭疽病、萎黄病等の発生を抑えるため、健全親株を確保する。特に、育苗期に発生が認められた圃場では優良原種苗等へ更新する。また、これらの親株についても秋季から炭疽病、うどんこ病及びハダニ類の防除を徹底する。

## 【ナス】

### 1. すすかび病

10月が感染期のため、感染前に防除を徹底する。

## 【施設果菜類（キュウリ、トマト、ナス等）共通】

### 1. コナジラミ類やアザミウマ類

発生初期の薬剤防除を徹底する。キュウリおよびトマトでは、今後これらが媒介するウイルス病が発生しやすいため、罹病株の発生に注意し見つけた場合は早急に処分する。

## 【タマネギ】

### 1. ペと病

菌の苗への感染を防ぐため、育苗期から定期的に薬剤防除を行う。

## イチゴ（本圃）

巡回調査(12圃場)  
9月15日～17日



巡回調査時の生育状況

### 1. うどんこ病

#### 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年より少ない）

#### 2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生株率は3.0%（平年2.7%、前年8.3%）であり、平年並で前年より少ない。（図1参照）〈±〉
- (2)病害虫防除員の調査（4圃場）では、発生を認めていない。〈－〉
- (3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

#### 3) 防除上注意すべき事項

- (1)防除対策については特記事項等を参照する。

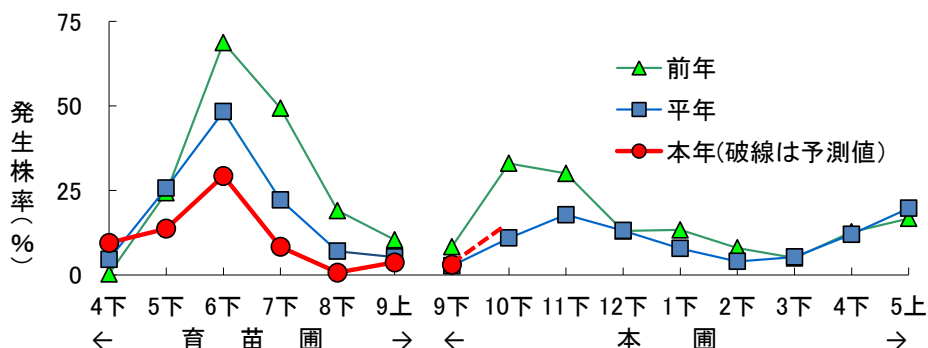


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

### 2. ハダニ類

#### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

#### 2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生株率は12.0%（平年7.5%、前年9.5%）であり、平年よりやや多く、前年並である。（図1参照）〈±～+〉
- (2)病害虫防除員の調査（4圃場）における発生株率は0～32%となっている。〈±～+〉
- (3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

#### 3) 防除上注意すべき事項

- (1)圃場または種類によっては、薬剤感受性の低下がみられるため、薬剤の選定に注意する。
- (2)その他の防除対策については特記事項等を参照する。

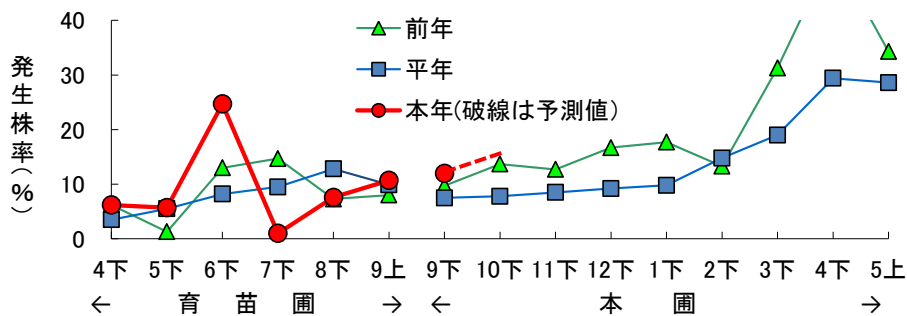


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

### 3. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生株率は2.8%（平年1.3%、前年0.0%）であり、平年よりやや多く、前年より多い。（図1参照）〈±～+〉
- (2)病害虫防除員の調査（4圃場）における発生株率は、0～4%となっている。〈±〉
- (3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)発生初期に薬剤防除を行う。

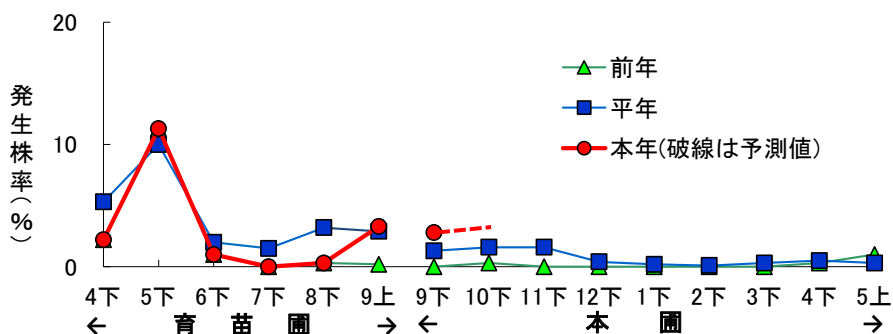


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

## ナス（促成）

（巡回調査：9月17～24日）

### 1. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生株率は16.9%（平年9.6%、前年2.6%）であり、平年よりやや多く前年より多い。（図1）〈±～+〉
- (2)病害虫防除員の調査（4圃場）では、発生を認めていない。〈-～±〉
- (3)気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



巡回調査時の生育状況

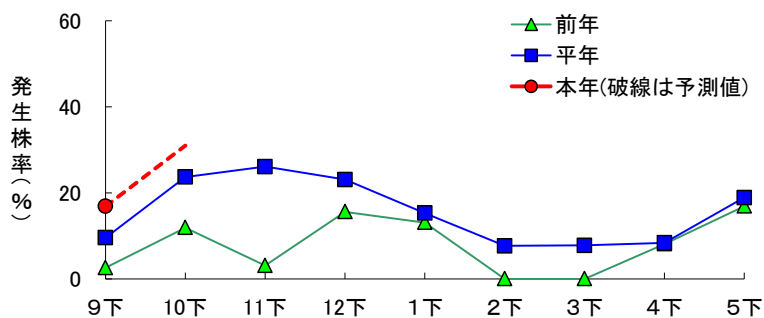


図1 アザミウマ類のナスでの発生推移

## 2. コナジラミ類

### 1) 予報の内容

発生量：平年より少ない（前年並）

### 2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率は38.8%（平年64.8%、前年47.9%）で、平年より少なく前年よりやや少ない。（図1）〈-〉
- (2) 病害虫防除員の調査（4圃場）では、2圃場で発生が見られ、発生株率は3.8%である。〈-〉
- (3) 気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内の密度を下げるため、寄生葉はできるだけ除去して、施設外へ持ち出し処分する。
- (2) 葉裏や下位葉にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

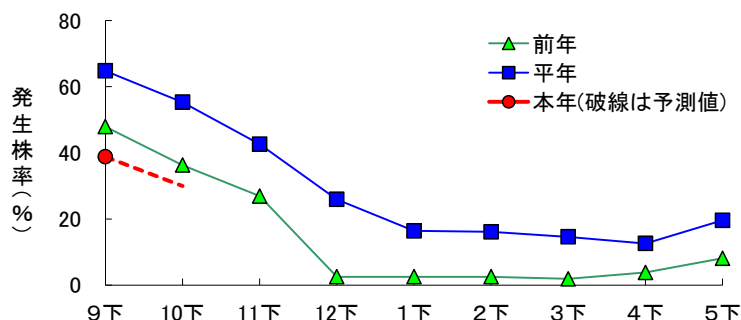


図1 コナジラミ類のナスでの発生推移

## キュウリ（抑制）

巡回調査（8圃場）  
9月15日～16日



巡回調査時の生育状況

### 1. ベと病

#### 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

#### 2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率は3.8%（平年7.0%、前年8.9%）であり、平年および前年よりやや少ない。（図1参照）〈-～±〉
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

#### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 下位葉に発生がみられた時点から防除を行う。

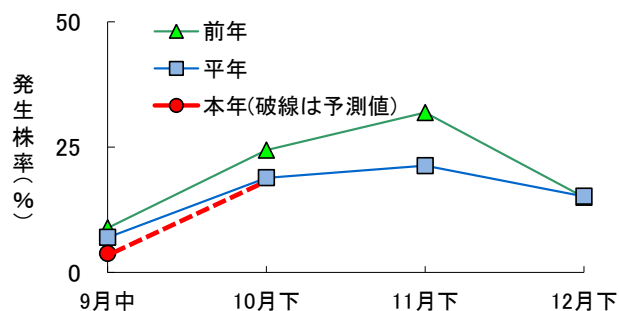


図1 キュウリベと病の発推移

## 2. 褐斑病

### 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年より多い）

### 2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生株率は6.9%（平年9.0%、前年0.8%）であり、発生は一部の品種等に限られるものの、平年並で前年より多い。（図1参照）〈±〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう計画的な防除を行う。

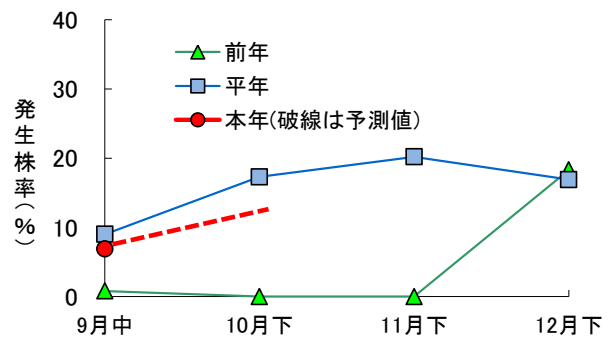


図1 キュウリ褐斑病の発生推移

## 3. アザミウマ類

### 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

### 2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生を認めておらず（平年3.1%、前年8.1%）であり、平年よりやや少なく前年より少ない。（図1参照）〈-~±〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 防除対策については特記事項等を参照する。

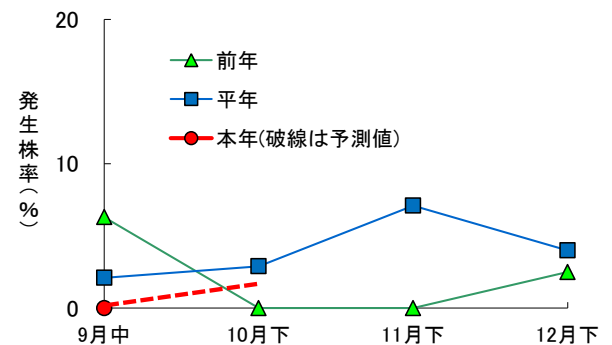


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移

## 4. コナジラミ類

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

### 2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生株率は1.3%（平年12.1%、前年3.8%）であり、平年よりやや少なく前年並である。（図1参照）〈-~±〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 防除対策については特記事項等を参照する。

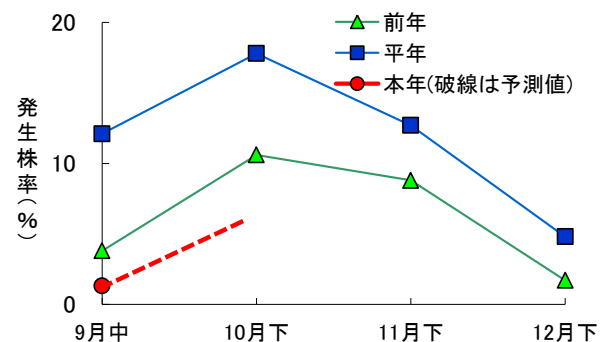


図1 コナジラミ類のキュウリでの発生推移

# アスパラガス

巡回調査(8圃場)  
9月15日～17日



巡回調査時の生育状況

## 1. 茎枯病

### 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

### 2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生株率は2.5%（平年1.9%、前年1.3%）であり、平年並で前年よりやや多い。（図1参照）〈±〉
- (2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1)発病茎は早急に除去し、圃場外で処分する。

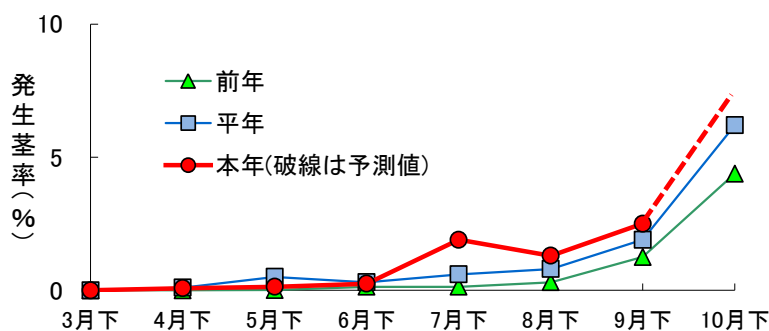


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

## 2. 褐斑病

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

### 2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生株率は46.3%（平年32.8%、前年48.8%）であり、平年よりやや多く前年並。（図1参照）〈±～+〉
- (2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1)罹病茎葉は早急に除去・処分し、防除を徹底する。

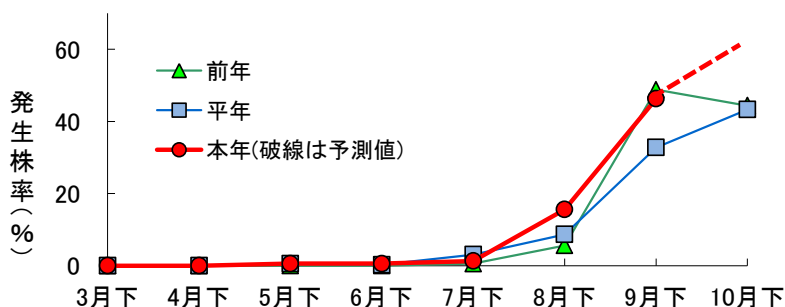


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

## 3. 斑点病

### 1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

### 2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生株率は29.4%（平年4.6%、前年9.4%）であり、平年及び前年より多い。（図1参照）〈+〉
- (2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病葉は早急に除去・処分し、防除を徹底する。

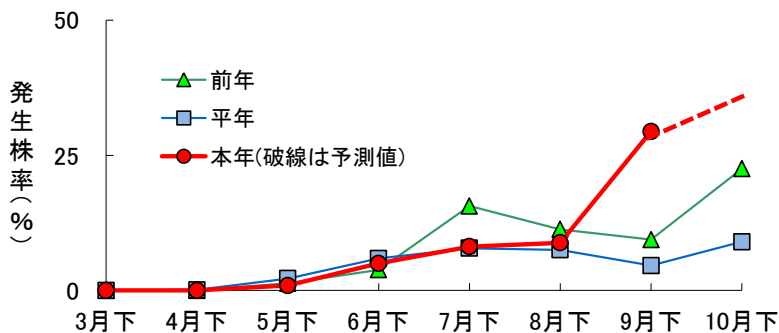


図1 アスパラガス斑点病の発生推移

## 野菜・花き共通

### 1. チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ, オオタバコガ) 本文掲載

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査において、イチゴでの食害は認めておらず (食害株率：平年1.9%、前年1.3%)、平年よりやや少なく前年並である。(図1参照) (一~±)
- (2) 巡回調査において、キュウリでの食害は認めておらず (食害株率：平年3.0%、前年0.6%)、平年よりやや少なく前年並である。(図2参照) (一~±)
- (3) 巡回調査では、アスパラガスにおける食害は認めておらず (食害株率：平年5.9%、前年0%)、平年よりやや少なく前年並である。(図3参照) (一~±)
- (4) 巡回調査では、ナスにおける食害を認めておらず (食害株率：平年2.9%、前年0.0%)、平年よりやや少なく、前年並である。(図4参照) (一~±)
- (5) 巡回調査では、キクにおける食害を認めておらず (食害株率：平年1.0%、前年0%)、平年よりやや少なく、前年並である。(図5参照) (一~±)
- (6) フェロモントラップにおけるハスモンヨトウ及びオオタバコガの誘殺数は、平年並~やや少なく推移している (図6, 7参照)。 (一~±)
- (7) 気象予報では、並発生の条件となっている。 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場内での発生状況の把握に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。

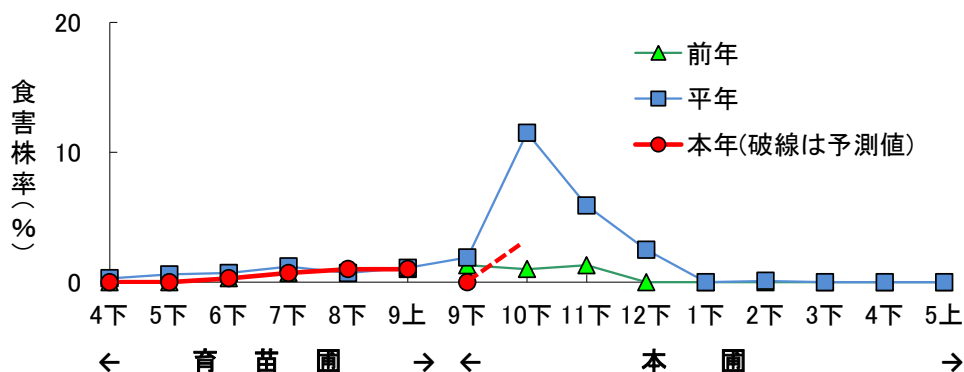


図1 チョウ目害虫によるイチゴの食害株率の推移



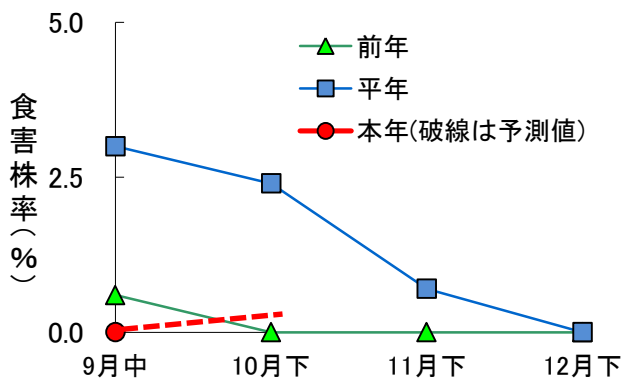


図2 チョウ目害虫によるキュウリの食害株率の推移

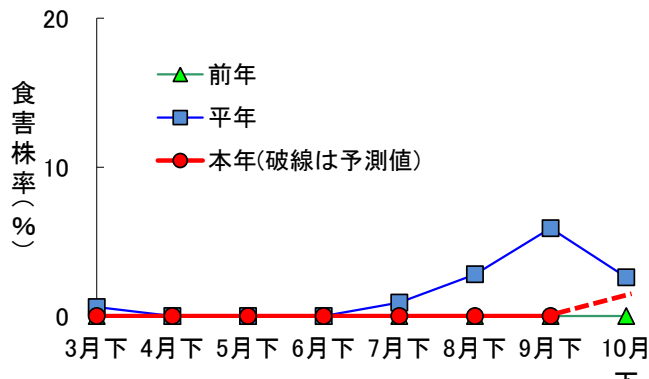


図3 チョウ目害虫のアスパラガスでの食害株率の推移

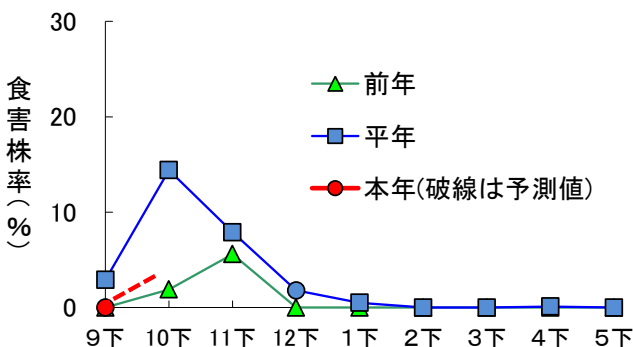


図4 チョウ目害虫のナスでの食害株率の推移

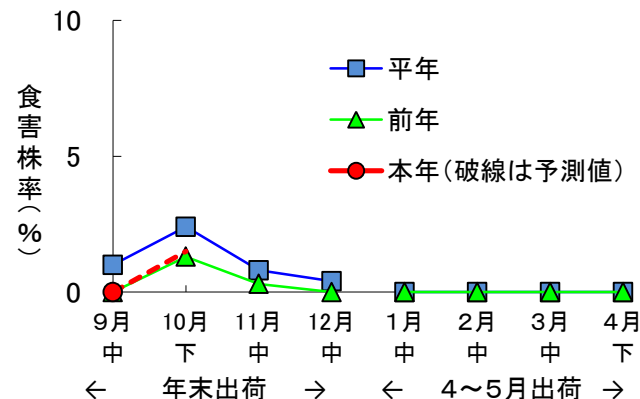


図5 チョウ目害虫のキクでの食害株率の推移

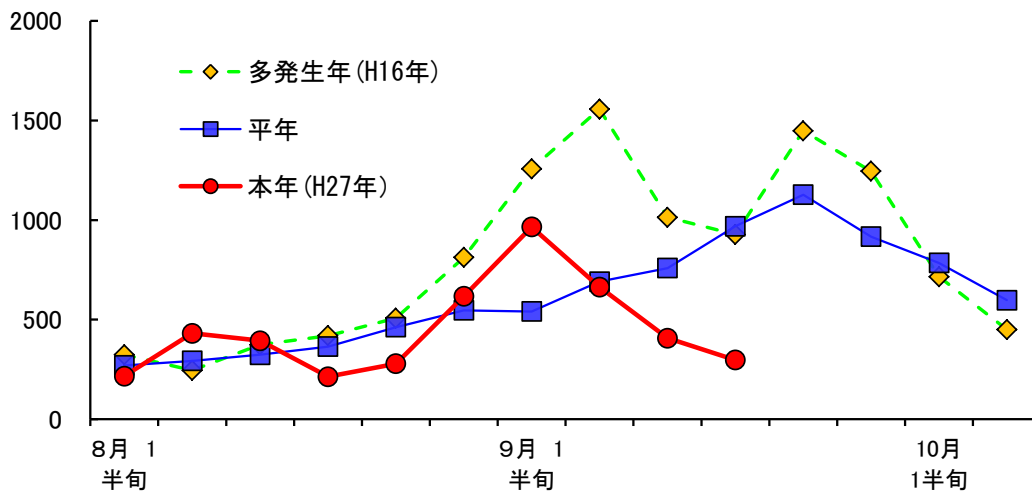


図6 フェロモントラップによるハスモンヨトウの半月別誘殺数（10月2半月まで）  
（農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内9地点の平均誘殺数。ただし、年によっては、8月2半月頃から調査開始の地点がある。）

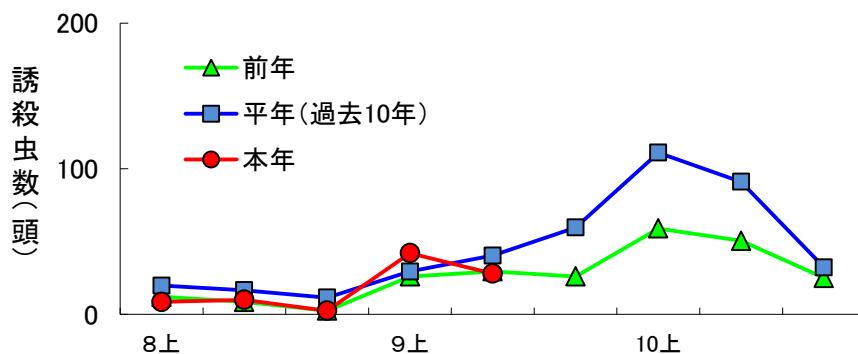


図7 フェロモントラップによるオオタバコガの半月別誘殺数  
（病害虫防除員による川副町2地点での平均誘殺数）

# 花き

## 【概要】

作物名	病害虫名	10月の 予想発生量		<a href="#">病害虫防除の てびき記載頁</a>	備考
		平年比	前年比		
キク (年末出荷 タイプ)	白さび病	並	並	375～376	
	アザミウマ類	<u>やや多</u>	<u>やや多</u>	382～383	
	アブラムシ類	並	やや少	379～380	
	ハダニ類	並	並	380～381	
	ハモグリバエ類	やや少	並	384～385	
野菜・花き共通	チョウ目害虫	並	並	383～384	

## 【特記事項】

### 1. アザミウマ類

特にミカンキイロアザミウマは、キクえそ病・茎えそ病を媒介するため十分に注意する。生息源となる圃場周辺の雑草を除草するとともに、発生初期からの防除を徹底する。

### 2. チョウ目害虫

幼虫の齢が進むと薬剤の効果が落ちるので、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。特に、オオタバコガは薬剤がかかりにくい新芽や花蕾に食入するので、よく観察して初期防除を徹底する。

### 3. 白さび病

気温の低下に伴い、夜間にハウスを閉め込むようになると発生しやすくなる。発病してからでは防除が難しいため、薬剤の定期的な予防散布を行う。

## キク

(巡回調査：9月17～24日)

## 1. アザミウマ類 (クロゲハナアザミウマ、 ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロ アザミウマ)



巡回調査時の生育状況

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い (前年よりやや多い)

### 2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生株率は7.8% (平年3.2%、前年12.9%) であり、平年よりやや多く前年よりやや少ない。(図1) <±～+>

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。<±>

### 3) 防除上注意すべき事項

(1)クロゲハナアザミウマは、葉裏に寄生していることが多いので、葉裏にも薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

(2)その他については特記事項参照。

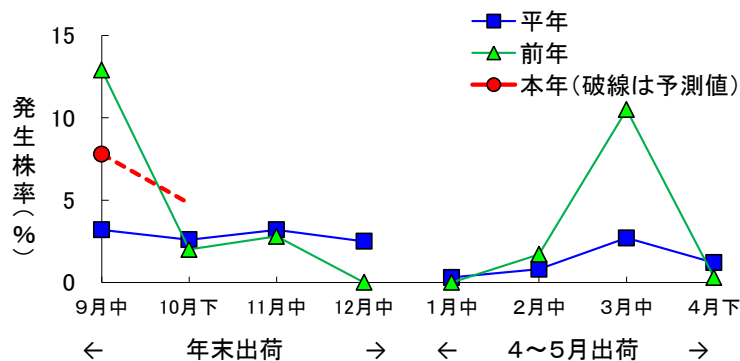


図1 アザミウマ類のキクでの発生推移

## 2. ハダニ類

### 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

### 2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生株率は0.8%（平年3.6%、前年0%）であり、平年よりやや少なく前年並である。（図1）

〈-~±〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

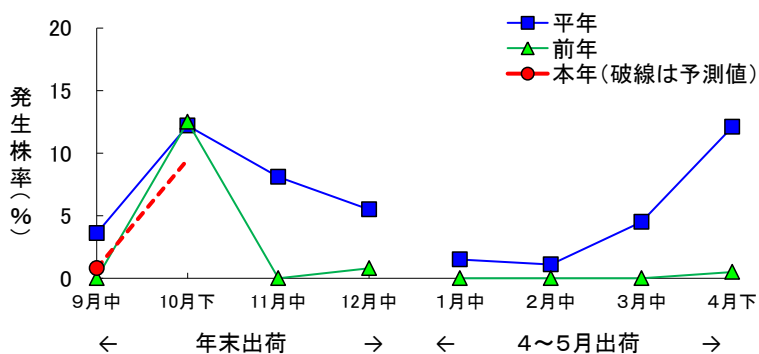


図1 ハダニ類のキクでの発生推移

## 3. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ）

### 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

### 2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、キクにおける食害を認めていない（食害株率：平年1.0%、前年0%）。（図1）〈-~±〉

(2) フェロモントラップにおけるハスモンヨトウ及びオオタバコガの誘殺数は平年並~やや少なく推移している。（P16の図6、7）〈-~±〉

(3) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 施設開口部に防虫ネット等を設置し、施設内への侵入を防止する。

(2) その他については特記事項参照。

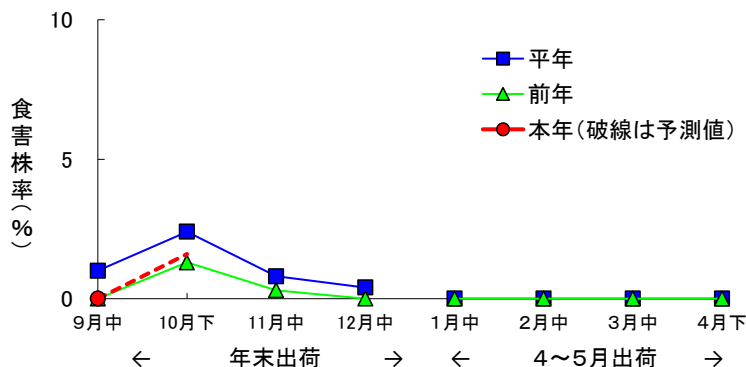


図1 チョウ目害虫のキクでの食害株率の推移

## 5. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に8月27日～9月25日までに発表されたもの

警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）

作物名	病害虫名	九州・山口		その他	
		注意報	警報	注意報	警報
水稲	いもち病	9/2 福岡県 9/3 熊本県 9/4 大分県 9/4 佐賀県			
カキ	炭疽病			9/25 香川県	
モモ	せん孔細菌病			9/8 和歌山県	
イチゴ	うどんこ病			9/8 神奈川県	
キャベツ	コナガ			9/15 愛知県	
キュウリ	べと病			8/31 岩手県	
トマト	灰色かび病			9/9 岐阜県	
ネギ	ネギアザミウマ			8/27 秋田県	

特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）

作物名	病害虫名	発表日及び発信元
トマト	葉かび病（レース4.9）	9/14 高知県
トルコギキョウ	えそ輪紋病（IYSV）	9/15 熊本県

## 6. 農薬の適正使用を徹底しましょう！

○農薬の飛散による不適正使用事例が発生しています。

特に周辺に収穫時期の作物や間もなく収穫を迎える作物が栽培されているときは、飛散防止対策が重要です！

- 風が強い日の散布は避ける。
- 粒子の大きいノズルで、低圧で散布。
- 散布の際、隣接の作物にシート等をかぶせる。
- 同じ農薬が使える作物を集約して栽培。

（例）

